
壊れた宝物

ごり

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

壊れた宝物

【Nコード】

N7992B

【作者名】

111

【あらすじ】

不注意で壊れてしまった筒状アクアリウム。漏れた水が滴り、出来上がった水溜りは大きいものとなり。

(前書き)

原稿用紙10枚以内という規定で書いたものですので、かなりの駄作です。もう少し短くまとめられる技術があればいいんですが・・・。

壊れた宝物

「んあ？」

青年は瞳を下に向ける。

「やべっ」

そう言ったときには既に遅い。

陶器が割れるような音が鳴る。

「あーまじかよ。めんどくせえ。誰だよこんなところにこれ置いたやっ」

無論自分しかいないのだが、人間とは責任転換をしたがる動物である。

青年はゆったりとした動きで台所に足を運ぶ。戻ってくるときには手に台拭きが握られていた。

卓上には割れた筒状アクリウム。

中の液体が漏れていた。液体は卓上を外へと伝い、そして下に滴る。

フローリングを傷つけないために敷かれた絨毯の上には、小さな水溜りができていた。

卓上から液体が滴る度に、水溜りの水面が揺らぐ。しかしそれは均等間隔だ。

だがその法則を突如破るものがある。

台拭きだ。

青年は台拭きを乱暴に水溜りへ落とすと、今度は乱雑に吹き始める。苛立っているらしい。

「っし」

青年は絨毯から台拭きを離す。まだ湿り気が残るものの、気にするほどのものでもない。

青年はステンレスの流しに台拭きを投げ込むと、足早にベッドに潜り込む。

寢息はすぐに聞こえてきた。時計の針は2時40分を指している。部屋は暗い。音もない。だがひとつだけ異常と言えるもの、見開かれた光る双眸が卓上から青年を見下ろしていた。

「えーあれ壊しちゃったのお？」

少女は頬を膨らませる。

「結構お気に入りだったのに」

膨れっ面を向ける先は隣の青年。

「仕方ねえだろ。トイレ行くだけだったから電気付けてなかったんだよ。それにあんな簡単に壊れるあのおもちゃが悪いんだっつーの」

青年は弁解に励もうとするが、

「それは言い訳」

とのことらしい。

「第一、おもちゃじゃなくて宝物でしょ？秀くんちっちゃいころから大事そうにしてたじゃん」

「昔と今じゃ物の見方が違い。 “ころから”じゃなくて “は”だ。

今更惜しくもねえよ」

青年は前を向いたまま言う。

「今失くして惜しいのはお前と金だ、ばーか」

少女はため息を吐いた。

「そこにお金が無ければ感動できたのに。まあいいや、それより今日も泊まりに行つていい？」

「んあ？ああ、いいぜ。このまま来るか？」

「うーん、と少女は悩み、

「着替えだけ。寄つてくれるよね？」

言いながら少女が指で指し示しているのは、おそらく少女の自宅のある方向だろう。

仕方ねえな、と少年は足先の向きを変え、示された方向へと歩き始めた。

「毎回思っただけだよ、ここの臭いおかしくねえ？」

青年は道の左側、貯水槽を見ながら言う。

「なんかこう、ただ臭いんじゃないやなくて吐き気がしてくるっていうか」

少女は前を向いたまま、

「臭いところなんて全部一緒だよ。共通してるのは近くにいたくないってことだけ。でも秀くんがあのアクリウム拾ったのってこころなんですよ？」

「昔は大して臭くなかったんだよ。だからたまに遊びに来てただけだよ。そういやここで落ちて死んじまったガキがいたらしいな。俺も危うくその仲間入りするところだったぜ」

「亡くなった人に対してそういうこと言わないの。それに随分昔の話だよ、それ」

少女は青年を見るが、青年は未だに貯水槽に目を向けたままである。何がそんなに気になるのか。

少女はむっとし、青年に荷物を押し付けると、

「後に家に着いた方が晩御飯とか買いに行くこと」

そう言っ走り出した。

「いや、待て、おい、ふざけんな」

青年も慌てて走り出す。

誰もいなくなった貯水槽付近。

しかし知らぬ間に、

「……………」

そのまだ新しい柵の内側に男の子が一人立っていた。

全身を水に濡らした男の子が。

そこには誰もいない。

「あれ？何の音だろ」

青年が近くのコンビニに行っている間、少女は部屋で一人だ。その部屋の中に音が響く。

「水漏れ？」

少女は音の出所を確かめようと、腰掛けていたベッドから降りよ
うとした。

だが床に足を付けた瞬間。

「きゃっ……！」

そこは床では無かった。

少女の体が床だった場所に沈む。

「え？……え？」

水に浮かぶ少女は状況が理解できない。

「う……」

少女は今頃その臭いに気付く。

貯水池の臭いだ。

だが少女はその香りを嗅いでなお状況が理解できない。

「どうということ？」

必死で浮かぼうとする少女は周囲を確認する。

家具類は沈んでいない。

「あ……」

だが少女はテーブルの上に一つの異常を確認する。

壊れたアクアリウム。

突如そのアクアリウムに手が伸びた。

誰？と思い少女が顔を上げると、

「だ、だ……ぼど」

手の持ち主の口から出るのは水と声。

「ひっ……！」

少女の顔が固まる。

「ごぼじ……ごぼじだ」

少女の首に手が伸びる。

部屋は狭く、少女にそれを避ける方法はない。

「いやあああああ……！」

次の瞬間、

「がつ……」

鈍い音と共に少女の意識は消えた。

「いやあああああ！……！」

青年はアパートの階段を上りながら声を聞く。
手にはコンビニ袋をぶら下げている。

「……………！」

只ならぬ少女の叫び声に、青年は手に持つコンビニ袋を投げ捨て
走り出した。

部屋の扉を開ける。

だがそこに少女の姿は無い。

「聡美！いるのか！」

青年は靴のまま中にかかる。

突然後ろから肩を叩かれた。

「聡美！」

青年は勢いよく振り返る。

だがそこにいたのは少女では無く、

「ぼくど…だが、だがだぼど」

口から水と声を発する男の子。

だがその視線はこちらを見下げている。

「なっ……………！」

青年はいつの間にか沈んでいた。

床であったはずの場所に沈む。その疑問に当惑する前に青年は視

線をテーブルに送り、そしてひとつの異常を見つけた。

「なんで……………」

昨日片付けたはずの壊れたアクリウム。

「ごぼ、ごぼじた…」

今、当惑する青年の首に手が伸びる。

「がつ……………」

結局どの疑問の答えも出せぬまま、鈍いつめき声と共に青年は意

識を失った。

誰もいない貯水槽付近。

しかしそのフェンスの内側に男の子が立っている。

片手に壊れたアクアリウム、もう片方の手に長さの違う2種類の髪の毛を握り、全身を水で濡らした男の子が。

「だがだ……ほど」

男の子は口から水と声を発すると、その身を貯水槽へと投じた。

水しぶきは上がらない。

水面にはアクアリウムが浮かんでいる。

そして沈んだ。

もちろんそこには誰もいない。

(後書き)

貯水槽も大きな水溜りです。男の子が現れた理由は二つの水溜りが空間を繋いだからでしょうか。

壊れた宝物

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7992b/>

壊れた宝物

2009年7月3日19時04分発行